

新経済地理学に基づいた観光客の目的地選択行動の構造推定

名古屋大学大学院 経済学研究科
安達 有祐

報告要旨

近年、世界全体で観光客数が増加している。増加傾向にある観光客が地域経済に与える影響について、観光客に財やサービスを提供する観光産業の集積に着目した研究が行われている。これらの研究は、多様性への選好と呼ばれる観光客が財やサービスの種類が多いことに魅力を感じる性質を仮定している。この仮定は、観光産業の集積に関する理論的な帰結に影響を与えている。

本稿の目的は、観光客が多様性への選好を持つという仮説を実際のデータから検証することである。検証を行う方法として、まず新経済地理学に基づいて観光客の目的地を選択する行動のモデルを提案した。次に、提案したモデルに実際のデータを適用しパラメータの推定を行うことで仮説を検証した。本稿は主に Eurostat のデータを使用した¹。分析対象はヨーロッパ圏内の観光客で、期間は 2012 年から 2014 年までの 3 年間である。本稿の分析は複数の国を対象とした分析であるため、個票データが手に入らなかった。そこで、Berry, Levinsohn and Pakes (1995) で提案された集計データから Mixed logit model の推定を行う手法を用いて、観光客の目的地選択行動を分析した²。

推定の結果、観光客は多様性への選好を持つことが示唆された。また、新経済地理学の理論から導かれた変数のうちほとんどの変数が有意となっていた。したがって、本稿の分析により観光客の増加は観光産業の企業を集積させる要因になることを示唆する結論を得た。

¹ Eurostat のホームページからデータを取得した。URL <http://ec.europa.eu/eurostat>

² Berry, Steven, James Levinsohn and Ariel Pakes (1995) “Automobile Prices in Market Equilibrium” *Econometrica*, Vol.63, 841-890.